

図版解説

黄輔周の舌画—民国期絵画資料—

鶴田 武 良

中国人最初の東京美術学校留学生黄輔周は一九〇五年（明治三八）九月西洋画科撰科に入学し、一九〇八年度（明治四一）に同校を除名されたことが吉田千鶴子氏によって紹介されたが、その後の動静については不明であった。ところがホノルル美術館保管（一九九五年二月）黄仲方コレクションの黄二南の舌画「竹石図」（図版1）に「黄輔周印」があることから、一九三〇年ごろから一九四〇年代はじめにかけて舌画家として知られた黄二南が黄輔周であることが判明し、また彼は在学中に、やはり東京美術学校西洋画科撰科に留学していた李岸（一八八〇—一九四二）、曾延年（一八七三—一九三七）が組織した中国最初の話劇団体春柳社に加入して演劇活動を行っていたことがわかったので、合わせて紹介しておきたい。

黄輔周は東京美術学校西洋画科撰科第三学年まで進んだが、第四学年在学中の一九〇八年度に除名され、以後黄輔周の名は見えない。

舌画家黄二南を紹介したのは、黄二南の画室を訪問して、舌画制作の様子を記事と写真（挿図1）で伝えた『北洋画報』第五六九期（第二ページ、一九三〇年十二月五日刊）が最初であろう。その後も同誌は第一〇二七期（一九三三年十二月二十一日）まで、たびたび写真入りで黄二南の動静を伝え、第六〇七期（一九三二年四月四日）および第七六〇期（一九三三年四月二日）を「舌画家黄二南專頁」とした。それらの記事によると、黄二南の経歴と彼が舌画を創始した経緯は次のようである。⁵⁾

黄二南は河北の人、山東で成長して同地の高等学堂を卒業後、日本に留学して美術を学び、およそ西洋画法で極めないものはなかったが、絵画で名を揚げ

ることは欲しなかった。帰国したときは、ちょうど清末の混乱期で、朝廷の政治は乱れ、北方の空気は閉塞していた。そこで二、三の同志と春柳新劇社を組織して、革命思想を中下層の民衆に鼓吹しようとした。一九一二年中華民国政府が成立すると教育部、農商部に勤務したのち、山東に戻って軍人となり、旅団長に進んだ。一九二九年除隊して、日々画を楽しんでいる。若いときに学んだ油画、水彩画は絶妙を極めたが、それらはいずれも「国粹」（中国に固有なもの）ではないので、二度と描かなかった。ある本で「墨を噴いて絵を描いた」という記述を見たが、世間にはこの画法が伝わっていない。そこでいろいろと研究して舌画を創めた。それは一杯の碗の墨を口に含み、舌を筆の代わりにして、白い練絹の上に吐きだしてさまざまな花鳥、山水を描くもので、できあがると実物に似ないものはない。世間では印度僧了然が噴墨法を善くしたと伝えられているが、それとはちがう。了然の画法はただ墨を噴き出して、それがたまたま何かの形に似ることを求めるもので、舌を使うものではない。了然の噴墨は、世間では伝説になっているが、真蹟を見ることができない。黄は二十年前日本に留学したとき、すでに舌を使って絵を描くことができたが、今日のように巧みではなかった。この四、五年来はじめて大いに進歩した。

黄二南は、左右の手で書画を善くした劉勞芝と古物収蔵家で文人として知られた揚州の方地山（名爾謙、一八七二—一九三六）の二人を師とした。黄二南は近頃、彭代柄、吳詠香、さらに蘇昌泰（字吉亨）の三人を弟子にしたが、「三年筆を用いなければ、舌を使うことはできない」と言ってなかなか舌画を伝授しない。

『北洋画報』にいう春柳新劇社は、一九〇六年、東京美術学校西洋画科撰科留学中の李岸と曾延年が藤沢浅二郎（一八六六—一九一七）の指導を受けて組織した、中国最初の新劇（話劇）団体春柳社のことであろう。春柳社は一九〇七年二月十一日、第一回公演に駿河台の中国青年会（中華基督教青年会館）で、デユマ『椿姫』の林紆訳『巴黎茶花女遺事』を脚色した『茶花女』を上演し、それが評判となって芝居好きの清国人留学生たちが新たに参加した。その中に黄二難がいた。⁶⁾

春柳社は翌一九〇七年六月、アメリカの H. E. B. Stowe 作『Uncle Tom's Cabin』の林紆訳『黒奴籲天録』を「五幕の新派劇風に脚色して」本郷座で公演した。この公演の番付によると李岸（息霜）はシャーベ夫人エミリー、酔っ払いなどに扮し、曾延年（存崇）は奴隷トム、ハントゲンなどに扮している。第一幕、第二幕、第三幕で農場主シエルビーに扮し、第四幕では大山君子に、第五幕で兵士に扮した「喃喃」はこの公演の重要演員であった黄二難と同一人と考えられる。当時の新聞に「四幕目かであった美術学校にゐる留学生某が大山君子と云ふ日本令嬢に扮して出た」とあること、『茶花女』公演を見て春柳社に加入し、のちに中国話劇運動に重要な役割を果たした歐陽予倩も「黄二難は美術学校で洋画を習っていた」と言っていること、林子青編著『弘一大師年譜』⁽¹⁰⁾にも「黄二難（肄業美術学校西画科）」とあることなどから、黄二難（喃喃）は黄輔周とみて間違いない。なお、黄二難は黄二南と音通である。

挿図 1 黄二南 舌画制作場景 『北洋画報』第569期から

挿図 2 徐悲鴻作「素描黄二南肖像」
『北洋画報』第629期から

この公演は演技の巧みさで好評を博したが、なかでも黄喃喃の扮装と演技が評判であった。

……而して扮装の点で、一番人目を惹いたのは、解而培（引用者註・シエルビーのこと）を演じた黄喃喃で、「眉から鼻のつくりが西洋人そっくりで、特に白粉の塗りやうが、白人種の肌色を能く写してゐた」（青々園）との評判であつた。……しかも彼は、芸も亦達者で、「解而培の本役サラリとして、何処までも西洋の舞台なるは豪し。仕出しの日本の令嬢は、本筋とは時代違ひのホンのお景気に過ぎざれど、色気ある娘形の日本語巧にして、われ等を驚かしたり」と評した岡鬼太郎は抗白に次ぐ力演だつたと言つてゐる。喃喃の力演ぶりについては、この他にも「顔の扮装も体のこなしも、本物の米国人らしく、煩悶の表情もわざとならず」（蝶生）とか、「君子に扮したのは、前に解而培になつた喃喃であるが、頭から着こなし、身体の態度までが、日本のハイカラ令嬢を上手に扮したのみならず、『よくつてよ』式の日本語を、上手に遣つた器用さには驚いた」（青々園）といった批評も与へられてゐる……⁽¹¹⁾

第三幕でシエルビーに扮した黄喃喃について、伊原青青園は「これで四度衣装をかへる、その好みのよかつたところから察すると、此の人は一座での凝りやで且つ意装家らしく思はれる」と評して、一座の中でもハイカラぶりが際立っていたようである。

春柳社の公演は多くの中国人留学生をひきつけただけでなく、日本の劇評家にも好評であつた。「しかし、清国公使館は留学生が演劇を上演するのに好感を示さなかつた。風紀上の理由のほかに、おそらく演劇運動が孫文らの革命運動と結合するのを恐れたのであろう。事実、後述するように中国本土では、話劇運動は中国革命同盟会と密接な関係があつた。その為、一時的な興味で春柳社に参加していた者は、だんだんと社から離れて……一九〇八年四月一四日に常盤木クラブで三幕劇『生相隣』をやるのが精一杯という状況になつた。……この公演の後に、社の中心人物の一人、李岸（李叔同）は演劇に興味を失ない社の演劇活動から去つていった」⁽¹³⁾。

黄輔周が東京美術学校を除名されたのは、ちょうど李岸が春柳社から去った一九〇八年度であった。除名の理由については明らかにされていないが、演劇活動に参加していたことから、中国革命同盟会あるいは革命運動との関わりが推測される。少なくとも春柳社公演に関する記事からは、学費滞納など経済的なことが原因であったとは考えられない。清国公使館は、陸鏡若の組織する申酉会が一九〇九年四月牛込高等演藝館で『血蓑衣』などを上演したのち、「公式に演劇活動禁止令を出した」⁽¹⁵⁾ように、留学生の演劇活動には神経を尖らせていた。また、文部省も留学生の政治活動、あるいは社会主義活動については厳しい態度を取っていた。

一九〇七年六月の春柳社の『黒奴籲天録』上演以後、黄喃喃の動静は、一九〇八年度に東京美術学校を除名されたということ以外、伝わらない。欧陽予倩はのちに春柳社について回想したとき、「次の年（一九一一年）夏休みに帰国すると、ちょうど黄喃喃が上海で演劇を計画しているところで、陸鏡若は彼のために『社会鐘』（原作は佐藤紅緑『雲のひびき』）を演出した」というが、それを証する資料は見当たらない。次に黄喃喃の名が現れるのは、一九一二年四月三日の上海の新聞『申報』（第四面）で、天知派改良新劇大家を特聘した「新新舞台」が旧暦二月十七日夜（太陽暦四月四日）開演という大きな広告に上げられている二十九名の俳優の中に黄喃喃の名がある。演目は替わるが、黄喃喃の名はこの後も五月二日まで「新新舞台」の俳優として『申報』の広告に出ている。また、「記録に残っているものでは、辛亥革命後になるが、一九一二年旧暦五月に前期春柳社のメンバーであった黄喃喃が自由劇団を作ってA D C劇場で上演している」というから、新新舞台のあとも、上海での演劇活動はしばらく続いたようである。このとき一九一二年五月、あるいは旧暦五月を最後に、黄喃喃の名は再び消える。

次に彼の名が現れるのはほぼ二十年後の一九三〇年、舌画家黄二南としてである。先に引いた『北洋画報』の記事に従うなら、一九一二年夏ごろ演劇活動をやめ、中華民国政府の官吏となったことになるが、詳細については手がかりがない。

ところで、「墨を噴いて絵を描く」ことで普通知られているのは、張彦遠『歴代名画記』巻四に見える「口に丹墨を含んで、壁に噴いて龍獸のかたちをつくり出し

た」秦の烈裔である。黄が見たという記述は同書のことであろうか。とするならば、黄二南は舌画の着想を烈裔の噴墨から得たことになるが、確証はない。

黄二南が舌画を描く場景は、次のようであった。⁽¹⁸⁾

まず紙あるいは絹を長卓の上に広げ、動かないように四隅を釘で留める。二枚の皿を用意し、一枚には自分で磨った古墨を満たした。色はあまり濃くない。一枚には強烈な白乾酒を注いだ。まず長衣をぬいで、白乾酒を大きく一口飲み、次に酒と同量の墨を一口吸って頭を紙の上に俯ける。墨を吐くとき、もしも注意していないと、見えるのははじめは意味のない線、あるいは点々とした切れぎれの墨のかたまりだけで、描いているのが何かわからない。ただ頭が机の上で揺れていて、墨が舌から出ているのを見るだけである。やがて花になり葉になり、幹になり、人物、山水になり、一つとして似ていないものはなく、かつ神韻に富んでいる。手に筆を持って描くものも及ばないほどである。この作画はただ一枚の舌を用いるだけであるが、全身すべてが関係し、腕の一支一屈、足の一進一退、鬚の一払一掃、唇の閉じ開き、みな筆致でないものはない。さながら一本の万年筆である。この日は全部で舌画を四幅描いた。一幅は山水で、長川千里、芦の生える雪岸に雁数羽が飛び、遠くには帆をかけた舟が風をいっぱいを受けて進んでいる。一幅は牡丹で、数回舌を揮っただけで、根、花、葉すべて備わっている。一幅はぶどうで、棚から実が累累と下がり、幹が力強く屈曲し、蔓が絡まりついている。一幅は大きな鉢に植わった棕櫚で、たくさん葉が乱れのびていて、幹と樹皮は短髯に墨をつけて描いた。ほんものそっくりで、この図を見ると、夏の夜風がわきの下を通るような感じがする。一幅描くの約十分乃至十五分かかった。

黄二南は舌だけでなく指も使い、荷花の蕊や白菜の根は短髯を曳いて描き、書は指で描いた。また、もとは水墨だけで著色はしなかった、というのは顔料が有毒だからである。しかし、しばらく前、友人の医師が毒を含まない顔料、丹黄青緑を作ってくれてから、画法は大いに進歩し巧みになった。

一九三二年五月初、南京の国立中央大学教授徐悲鴻は夫人蔣碧薇、同じく中央大学教授潘玉良、学生など十三人を連れて華北に旅行した。一行は曲阜で孔府、孔林を参観し、泰山に登り、天津を訪れた。そのときまたまた天津において、徐悲鴻の一行と歓談した黄二南は、その場で舌画「牡丹図」を描いて蔣碧薇に贈り、徐悲鴻は返しに黄二南の「素描肖像画」（挿図2）を描いて贈った。⁽¹⁹⁾

黄二南の舌画は、天津とその周辺ではよく知られていたが、北平（北京）では知る人は少なく、とりわけ北平居留欧米人にはほとんど知られていなかった。天津滞在中のベルリン・民族学博物館極東部長雷興（E. D. Leising）はそれを遺憾に思ひ、一九三二年四月四日、北平・万国美術院で黄二南の舌画個展を開催した。当日、黄ははじめに舌画の歴史について講演し、次に舌画パフォーマンスを披露した。この個展がきっかけとなって黄二南の舌画は北平の人々の話題となり、また欧米にも知られるようになった。⁽²⁰⁾

なお、黄二南の舌画は一九三二年で一幅平均四十元であった。⁽²¹⁾ ほぼ同じころ、楊渭泉の錦灰堆図が尺十二元、蕭慈（字謙中）は尺十二元、高名でない画家はだいたい六尺一幅十二元から十八元であったから、相当高價であったといえよう。

天津・北京にはほぼ限られていた舌画家黄二南の名を、広く全国に知らせるようになったのは『東方雜誌』第三十卷第十六号⁽²²⁾であろう。同誌はグラビアページを「舌画家黄二南氏之作品」にあて、顔写真、濟南大学明湖図書館での舌画展覽會場景、パフォーマンスとして舌画を描く場面、舌画作品二点（石竹図、令箭荷花図）を紹介した。なお、説明の文章はない。

一九三九年七月、黄二南が個展開催と舌画制作のパフォーマンスを行うため上海・震旦大学を訪れたとき、黄にインタビューした蘭燕は黄二南の経歴と舌画について、『申報』に次のような記事を書いた。⁽²³⁾

舌画家黄二南氏を訪ねて

蘭燕

明日震旦大学で画展開催 五時から六時まで会場で舌画を表演

舌画専門家黄二南氏が上海に来てからすでに半月経った。昨日午後四時、上海美術界は特別に南京路の新雅茶室を借り黄氏を歓迎した。私ははじめて機会

を得て、氏と半時間ばかり話をした。私が黄氏にインタビューした場所は、中国飯店三〇四号室で、黄氏の二人の女弟子が同席した。

氏は流暢な北京語を話し、唇の上には短い口ひげをはやし、顔は血色よく、声は大きく朗々としている。氏は、私は今年もう五十六歳⁽²⁴⁾になり、気力は前に比べるとずいぶん落ちていますが、一幅長さ八尺の絵なら、以前は二時間で仕上げるのができましたが、今は二日間に分けて描かなければなりません、実際の描きかたはとても疲れるものです、と話した。

黄先生は女弟子に、長さ八尺の一幅の舌画を広げさせ、私たちに見せた。画面に描かれた一片の竹石は、三寸不爛の舌で竹葉石塊を描いたもので、それは確かに骨の折れる仕事である。

私は、黄先生が話した内容を、詳しくここに書き留めておきたい。

舌画の三つの難しさ

「舌画」というこの専門的な技術に関しては、簡単容易なことではありません。国画を深く研究した人でなければ描くことができません。

第一、描くのは、完全に集中した精神力によりきます。口に含んだ一口の墨は、もしもこの気力がなければ何も描き出すことができません。

第二、舌で絵を描くとき、目は紙から僅か一寸しか離れていませんから、目はすでにその機能をなくしています。このとき、あなたが描くのは自分が前もって画幅の上に留めた腹稿です。そうでなければ、あなた自身どこから描きだせばよいか分からないでしょう。

第三、描くときは、頭をただ上下に動かすだけでなく、同時に左右に揺り動かさなければなりません。ちよつと気持ちが悪くなり、すぐに頭がくらくらしてきます。

このいくつかのことから、あなたも「舌画」の難しさがお分かりと思います。

どのようにして舌画を描くか

舌画の画法および事前の準備は、とても簡単です。つまり、まずブランデーで口をすすぎ、その後口一杯に墨汁を含み、用意した紙あるいは絹の上に三寸の舌先を揮って描きます。

私が黄先生に、彩色画はどのようにして描きますかと問うたところ、先生は次のように答えた。自分が使う顔料は全て中国顔料ですから、描くのには問題はありません。一種の黄色顔料（藤黄⁽²⁵⁾）は有毒ですから、人の口に入れてはいけません。かつて北平にいたとき、協和医院のある医師が一種無毒の黄色顔料を送ってくれましたが、惜しいことに現在この顔料はすでに使ってしまい、まだ代わりの顔料を見つけないことができません。

騎兵旅団長を勤めて

黄先生は「七七」事变後⁽²⁷⁾に北平を離れたもので、家族は現在も北平に住んでいるということである。

「事变」が勃発して、わたしが倉惶と北平を離れるとき、身に付けていたのはたった六十元の旅費だけでした。途中ひたすら大同、晋南、西安、成都を通じてそのまま昆明に行き、さらに香港に行き、それから上海に来ました。この旅行中、西安、成都で難民・被災児童および各学校の奨学金のために描いた絵の額は合計四千元以上、そのほか私自身が使った旅行費用は六千元になります。黄先生の考えは、被災児童・難民のために、できるだけ力を尽くしたいということである。しかし、内地では実際のところ猛烈な空襲のもとで、誰がまだ絵を買う気持ちを持っているだろうか。だが各地の友人、藝術家、美術家、戯劇家のために宣伝し、紹介するのは、まあ国家のために何らかの力を尽くすことになるであろう。

二つの展覧会

黄先生は、十一年前に上海にいたことがあり、今回表面的には、上海は大きな変化はないようだ、次のように話した。

上海の古い友達、例えば以前の南社の柳亞子⁽²⁸⁾などにはまだ会っていません。昨日会見した上海の中国画家、西洋画家はたいへん多く、とても楽しいことでした。

上海にきてから半月になりますが、まだ外出することはあまりありません。ちょうど震旦大学のために五十幅の絵を描き終えたところです。それは七月一日に開催する展覧会の準備のためです。そのほか、自分で「舌画」パフォーマンス

ンスをするために準備しています。時間は五時から六時まで、入場料収入および作品の売上げは震旦大学の奨学金にあてられます。

震旦大学の展覧会が終わってから、虞洽卿⁽³⁰⁾、袁履登⁽³¹⁾諸先生が寧波同郷会を借りて、私のためにもうひとつ展覧会を開催する準備をしています。収入の半分は被災児童に贈ります。しかし、期日はまだ決定していません。

私が独学で舌画を研究し始めてから、すでに十数年が経っています。学び始めた時期は民国十七年（一九二八）で、初期の絵の題材は竹石でしたが、のちによりやく山水（挿図³）、花卉、雀鳥を描くようになりました。

氏自身は、以前ずっと軍隊で騎兵隊生活を送ってきて、騎兵旅団長を勤めたこともある。一人の軍人から「舌画」の専門家へ変わった、これはとても興味深いことである。

二幅の新奇な作品

彼は昨日ホテルで、また二幅の非常に新奇な絵を描いた。画法は花卉の花弁および枝葉の色彩を用いてもとの花卉を描いたもので、（手の指を用いて描いたもの）たとえば玫瑰花を描くには、玫瑰の花弁と枝葉を用いて描き、必ずしもほかの色彩を必要としない。できあがった玫瑰の花はやはり紫紅玫瑰で、青緑の枝葉はやはりもとの色である。

折好く明日、黄先生の展覧会が開幕することになっている、黄先生の舌画を見たいと思う人は震旦大学に行つて参観されるとよい。

このとき郎静山⁽³²⁾は、上海を訪れた黄二南を歓迎するため、六月二十九日午後、新雅酒樓に陳小蝶、吳湖帆および名女優蕭明など文藝界の名士数十人を招き、黄二南の舌画パフォーマンスを鑑賞した。黄二南は七月一日、震旦大学での個展開催に当つて午後五時から会場で舌画制作を披露し、二日は午後四時から五時まで、やはり個展会場で舌画パフォーマンスをおこなった⁽³³⁾。なお、入場券は一人一元と予告されたが、当日になって「各方面の要求により」一人二角に改められた。

その後の動静は、一九四一年五月北京で舌画個展を開催して、画法に進展があり山水画を善くし、優雅な趣があると評された⁽³⁴⁾のを最後とする。ただ、欧陽予倩は

『自我演戯以来』の脚注で、「黄二難先生は又の名二南、帰国後かつて民国初年上海で劇団を組織した、ただし期間はとても短かった、このことは「回憶春柳」のなかで触れた。のち、一時期彼は河南にいたことがある。二十年を隔てて一九三八年秋、思いがけず香港で一度会った。彼の話では、徐悲鴻と一緒に南洋に行くつもりであったが行かなかった、ということである。一九四九年秋、彼は北京に帰ってきた。一九五八年夏、彼が北京市の文史館にいと聞き、会いに行った。七十五歳で非常に壮健で、もっぱら舌画に従事しているということであった」と記しているから、解放後も舌画制作を続けていたことと、一九五八年夏七十五歳までの生存が確認される。しかし、解放後の黄二南については、他に資料が見当たらない。

欧陽予倩が黄二南に会った一九五八年といえ、その年の二月ごろから毛沢東「文藝講話」の方針と社会主義現実主義美術路線が強調されてゆき、やがて美術作品の優劣は描かれている題材が社会主義的かどうかによって決定されるという、「題材決定論」が優勢になってゆくところである。黄二南の舌画は、時世を覆ってゆく社会主義現実主義絵画から遠く隔たったものであったから、かつてのようにパフォーマンスタシとして制作することは時世が許さず、たとえ描いても、それを求める蒐集家もほとんどなく、発表する機会に完全に失われていたであろう。

なお、題賛は次のとおり。

定老法正 二南舌畫「黄輔周印」「二南」「廣長舌相」

挿図 3 黄二南作 舌画「山水図」
東京・個人蔵

南阜老人以左指頭作畫、蒼勁絶倫、吾邑古月可人亦以指頭作畫、吾皆深佩、今見二南先生以舌頭作畫、蒼勁勝于高君、誠千載無多人、再三讀後殊足深佩、記而歸之 庚午（一九三〇年）齊璜「白石翁」⁽³⁶⁾
舌頭石頭妙品妙品 柯璜謹識「柯璜印」⁽³⁷⁾

調査にあたってご配慮を頂いた黄仲方氏、ホノルル美術館東洋美術部長ジュリア・M・ホワイト氏、撮影して下さい下さった同館学芸員サティ・ベネス氏に御礼申し上げます。

〔補遺・楊渭泉の做パピエ・コレ作品〕

本誌第三百五十九号（一九九四年三月）で楊渭泉の做パピエ・コレ作品を紹介したが、一九九九年七月から二〇〇一年十月にかけて共同で、『申報』一八七二年—一九四九年所載美術関係記事・広告総索引（仮称、未刊）⁽³⁸⁾を作成した過程で、いくつか新たな資料を得たので、ここで紹介しておきたい。

民国期には、パピエ・コレ（コラージュ）を臨模した絵画は、「錦灰堆」あるいは「倒翻字紙籠」（ひっくりかえった紙くずかご）と呼ばれていたので、本稿では錦灰堆の名称を用いる。また「八破図」あるいは「八段錦」と呼ばれたともいう。なお、「錦灰堆」という名称は、元の錢選が「世間では棄てるものを自分は棄てないで、画に描き」（挿図4）、あるいは「蟹の甲、魚の骨、蝦のひげ、螺のから、荔枝の皮、たけのこの皮を描い」て「錦灰堆」と題した⁽³⁹⁾ことに因る。上海博物館に任伯年（一八四〇—一八九五）、張熊（一八〇三—一八八六）、朱偁（一八二六—一九〇〇）などの冊頁と一緒に、沈瑞清の⁽⁴⁰⁾錦灰堆図をもつ画冊がある（一九九七年四月二十五日筆者所見）。図は民国期の錦灰堆と錢選の画風の間位置する。沈瑞清の錦灰堆図の年記「甲戌」は一八七四年（同治十三年）としてよい。この資料だけでは断定できないが、錢選の錦灰堆がつかぬ伝統を持ち続けていた可能性がある。とするならば、錢選以来の伝統の上に、ブラックやピカソのパピエ・コレに触発されて、素材を中国独自のものに代え、貼り付けを臨模に代えて新たな画法が生み出されたものであろう。その時期は一九二〇年代末と推定されるが、詳細は今後の作品の発見に待た

なければならぬ。

『申報』によると、楊渭泉とほぼ同じ時期に、同じように錦灰堆画を描いた画家が他にもいた。陳沅龕、穆一龍、鄭佐宸などである。

『申報』に最初に見える錦灰堆画家は陳沅龕⁽⁴¹⁾である。同紙一九三二年十一月十日第十二面掲載の「陳沅龕画錦灰堆（断簡残編破字録図）潤例」がそれである。馬良⁽⁴²⁾が推薦のこぼを記し、「堂幅・横披每方尺十元、堆字（如福壽喜等）每方尺加洋二元、扇面・冊頁・斗方每十元」、代金を先に受けてから、引渡しの日を決めます、また墨代として代金の一割を頂きます、と記されている。同じ紙面の随筆「九三老人馬相伯語録」で、馬良は「私が見た世の錦灰堆は細部にこだわりすぎるか、あるいは草卒にすぎるかであるが、陳君の作は真蹟と異ならず、その神妙なこと感嘆するばかりで、むかしの錢選の絵に比べても勝っている」と、陳の作品を薦めている。

この文章からも、当時錦灰堆を描く画家が何人かいたことが知られる。なお、『申報』掲載と同じ潤例（揮毫料金表）が『湖社月刊』第七十七号⁽⁴³⁾に見えるから、いく

挿図 4 錢選「錦灰堆」台北・故宮博物院『故宮書画図録』第16巻から

つかの新聞、雑誌に広告したものであろう。ついで一九三四年三月七日（増加第二面）の『申報』は、ふつう撮影家として広く知られている穆一龍⁽⁴⁴⁾の錦灰堆扇面を図版で紹介するが、記事はない。

経歴は不明であるが、作品が現存する錦灰堆画家に鄭佐宸がいる。鄭佐宸は一九四五年四月三日から九日まで上海大観園で開催された「九友画展」⁽⁴⁵⁾に「錦灰堆」を出品したこと、錦灰堆「宋岳飛滿江紅詞」（挿図5）によって一九四六年冬の作画と龍山逸叟と号したことが知られる以外伝わるところがない。

これら錦灰堆画家の中でもっとも有名であったのが、先に紹介した楊渭泉である。『申報』は一九三六年十二月五日（第十七面）、「楊渭泉、書画の声價 日に増す」として「名書画家楊渭泉のつくる錦灰堆は描写が精巧で、描模は巧妙でほんものそっくりである、当世の名士が皆賛美している、もとの潤例は每尺十元、冊頁扇面は每件十元であったが、癸酉（一九三三）の年に二割上げ、丙子（一九三六）の年また二割値上げた、しかしその作品を好むものは、依然として大金を吝しまず絵を求めている、楊君の作画は一幅に五、六日、あるいは十日余りの時間を要し、臨模を極め、依頼者の気に入ってはじめてよしとする、そのため反故紙が山のようになっている、聞くところでは最近も制作に専念していて、依頼に応じきれないということである」と伝えたのを最初として、一九三七年二月十六日には「名画家楊渭泉は錦灰堆画をほしほしに、久しく于右任⁽⁴⁶⁾の賞玩するところであったが、于氏は

挿図 5 鄭佐宸作 錦灰堆「宋岳飛滿江紅詞」東京・個人蔵

このたび有名また貴重な碑帖二十余種を錦灰堆の資料にするため楊氏に贈った」とを伝え、同年四月二十二日(第十三画)には「名画家楊渭泉君は書法絵事に精通することおよそ三十年、國中に名を知られて久しい、その博古図は歴代の碑帖、書画、青銅器のすぐれたものを捜し集め、残片断簡を拾い集めて作品とするもので、模写は精巧きわまりない、今回首都美術展覧会に陳列されたところ、観るものは皆すばらしいと称賛し、大金を吝しまず争って購っている、聞くところでは、展覧会には名家の山水、人物、花草虫鳥がたくさん展示されていて見切れないほどであるが、楊氏の博古図ほど人を楽しませる作品はないことである」と紹介した。その後も『申報』には楊渭泉の錦灰堆に関する記事が散見し、ほかにも中国画会上海会員聚餐会に出席し、谷音画会賑災(救済募金)画展、中国画会第九回展、上海文藝書画会主催古今名人書画金石展に出品したこと、林森主席、于右任、黄炎培、段祺瑞、熊希齡などが題跋を寄せた錦灰堆画集が出版されたことなどを伝えている。また一九四一年五月三十日(第八画)には、画家楊渭泉の作る錦灰堆は断簡残編を臨模してそっくりで、すぐれている、中外の人士はみな称賛している、今春潤例を五割値上げしたが、それでも高價を吝しまず争って作品を求めものが絶えない、楊君の作品は制作に時間がかかるので、注文が山積していることである、聞くところでは近くまた潤例を上げることであると伝えた。

王中秀によると、一九三七年七月、日中戦争が始まってから国民党の金融システムは崩壊し、物價の騰貴がいちじるしくなった。画材に例をとると、戦争前は一割四分であった六尺料半紙は一九四四年十月には一枚九元になり、戦争前には一兩二元であった石青石緑は一九四四年十月には一兩二百元になった。このような画材の高騰に対処するためには、画家も潤例を次々に上げて行かざるを得なかった。たとえば各時期の「潤例」が残っていて、推移を見るのに便利な應野萍(一九一〇—一九九二)を例にとると、一九三六年七月には「堂幅四尺三十二元、手卷冊頁每方尺八元、紉摺扇每柄八元」であったが、一九四〇年三月には「山水画 整張四尺至六尺每尺二十五元、冊頁每方尺二十五元、紉摺扇每柄二十五元」に改められ、さらに一九四三年五月三十一日には、「六月から、これまでの潤例の五割増しとします。扇面は每頁三百元、水墨設色同例、青緑每頁六百元、金碧每頁一千二百元」と改め

られた。国民党の崩壊が目前に迫った一九四八年になるとインフレはますます、毎週、潤例を改める画家が出てきた。しかし、日ごとに物價が狂騰を続けるようになると、通貨での表示はもはや意味を持たなくなり、一九四九年三月には豊子愷のように「冊頁・扇面白米五斗、二方尺(長二尺幅一尺)立幅或横幅白米一石」と米を基準とする画家も現れたが、これはまた別の主題にゆずる。楊渭泉の一九四一年の二度におよぶ潤例改定は、当時の物價の状況を考慮に入れてもおおむね異例に属するし、ましてまだ物價が比較的安定していた一九三三年および一九三六年の値上げは、他の画家には例のないことで、人気が便乗したものといえよう。また『申報』の楊渭泉に関する記事と報道回数は、他の画家に対する報道に比べて異例であり、ほとんどの記事は楊渭泉の新聞を利用した巧妙な宣伝であったと考えられる。

このように名声を得ていたが、鄭逸梅は楊渭泉の錦灰堆は代筆によるものであったという興味深い逸話を伝えているので紹介しておきたい。

楊渭泉「錦灰堆」の代筆者

……上海で有名な「錦灰堆」画家といえば、誰もが知っているのは楊渭泉で、彼がこの道のただ一人の能手であることを認めている。楊が十年前に世を去ったとき、人々はみな彼を惜しんだものである。しかし、楊が勢力を持った商人であり、金銭欲に満ちた、絵画に対しては完全な門外漢で、一筆も描く事ができなかつたことを知る人はいない。このような、人を偽り欺く人物は旧社会にはよくあることであつた。

楊渭泉が自身で絵を描くことができないなら、それではすべての作品は当然だれかが代筆したものである。その代筆者はだれであろうか。すなわち現在上海市文史館員鄭達甫⁽⁵⁸⁾である。鄭は浙江省鎮海の人で、もとは郷里の小学校で教師をしていたが、絵画が好きで、とりわけ臨模が上手であつた。当時の小学校教員は待遇がはなはだ低く暮らしが立たなかつたので、鄭は仕方なく、自分の絵の力を頼りに上海に出てきて絵を賣ろうとした。しかし、大人名士のひきもなく親戚友人の仲間もなく、無名の貧乏人が上海でどうして生きてゆけようか、まさに進退きわまつたときに出会つたのがこの商人楊渭泉で、楊は彼を自

宅に引き留めた。当時の鄭達甫は自分でも九死に一生を得たと思ひ、すべて楊のいいなりであった。

それから楊は大々的に広告し、揮毫料金表を印刷、配布して、「錦灰堆」の専門画家となった。絵の注文があると、すぐに鄭に描かせ、揮毫料の六割を楊がとり、鄭は四割を受取ったが、紙や筆、絵具などの費用を負担しなければならなかった。楊は一筆も描くことなく、名利両方を得た。このようにして二十数年たち、世を欺き名を盗んだ楊渭泉は相当な財産を得た。しかし鄭は依然としてもとのままで、食うや食わずのくらしであった。のちに絵画市場は戦乱の影響をうけて、賣画生活は成り立たなくなつた。そこで楊は逐客令を下し、鄭に郷里に帰って仕事をさがすように迫つた。鄭は帰郷したがもとの学校に復職することはできず、結局山で薪を切つたり町で焼餅を賣つてくらしした。一九四九年以後、鄭はまた上海に出てきた。全国美術家協会は彼の「錦灰堆」を徵集して第二次全国美術展覧会に出品し、また上海市文史館館員に招聘された。

上海の故老ともいべき鄭逸梅のことは、これが真実であつたのであろう。ただ、一九五五年の「第二次全国美術展覧会出品目録」⁽⁵⁹⁾に鄭達甫の名はみえない。おそらく出品したものの、社会主義リアリズムからはほど遠い錦灰堆画は評選で外されたか、あるいは華東地区展の展覧にとどまつたものと考えられる。なお、鄭逸梅の文章から、楊渭泉の没年が一九五三、四年頃と推定されることを付記しておきたい。

なお、錢選については台北・国立故宫博物院書画処長王耀庭氏から、鄭達甫の略歴については上海の陶為衍氏から示教を得た。お礼申し上げたい。

(二〇〇五・九・二)

註

(1) 河北省)の人、本年二十二歳、洋画専攻の目的にて既に赤坂溜池の白馬会研究所にて準備し、日本語にも熟し居るを以て極めて教授に好都合なり……とある。

(2) 鶴田武良編『中国近代美術大事年表』(和泉市久保惣記念美術館、一九九七年刊)、一九三三年八月および一九四一年五月条

(3) 一九二六年七月七日創刊。はじめは週刊、のち三日刊、さらに隔日刊となり、一九三七年七月二十九日第一五八七期で停刊した。一九八五年十月、北京・書目文献出版社から影印版が出版された。

(4) 五八四期、五八五期、五八七期、五九二期、六〇三期、六〇七期、六二九期、六三九期、六四一期、六四五期、六九九期、七六〇期、七六三期、一〇二七期

(5) 次修「傳黃二南」(『北洋画報』第六〇七期第三ページ、一九三一年四月四日刊)、および秋塵「黃二南揮舌求志廬」(『北洋画報』第五八五期第二ページ、一九三二年二月五日刊)

(6) 中村忠行「春柳社」逸史稿(一)——歐陽予倩先生に捧ぐ(『天理大学学报』第二十二輯、一九五六年十二月刊)二五ページ

(7) 原本は早稲田大学演劇博物館所蔵。濱一衛「春柳社の黒奴翰天録について」(昭和二十八年『日本中国学会報』第五)、また中村忠行「春柳社」逸史稿(一)および歐陽予倩「回憶春柳」(『中国話劇運動五十年史料集』第一集所収)に引用。

(8) 明治四十年(一九〇七)六月五日『日本新聞』不問語、濱一衛「春柳社の黒奴翰天録について」一一五ページから引用。

(9) 歐陽予倩(おうようよせん)一八九九—一九六二 湖南省瀏陽の人。十五歳で来日して成城中学に学び、一九〇七年明治大学商科に入り、翌年早稲田大学文科に移る。一九〇七年春柳社に参加して「黒奴翰天録」に出演、一九一一年上海に帰って新劇同志会に加入、一九一四年には上海で春柳劇場を組織した。以後も南通伶工学校を創設して校長に就き、熊佛西の民衆戲劇社、上海戲劇協社、南国藝術学院戲劇系主任、上海市文化救亡協合理事をつとめ、解放後は中央戲劇学院院长、中国劇作家協会副主席、中国文連副主席などをつとめた。『自我演戯以来』八ページ(『欧陽予倩全集』第六卷、上海文藝出版社、一九九〇年刊)。

(10) 林子青著『弘一大師年譜』(弘化苑、一九五九年重印本)光緒三十二年条

(11) 中村忠行「春柳社」逸史稿(一)、また濱一衛「春柳社の黒奴翰天録について」にも引用。

(12) 濱一衛「春柳社の黒奴翰天録について」一一四ページ。同論文は(4)黒奴翰天録に活躍した人々で曾延年、李岩、李文権について黄二難を取り上げている。おそらく黄二難について述べた唯一の文章であろう。

- (13) 瀨戸宏『中国話劇成立史研究』（東方書店、二〇〇五年二月刊）四六一―四七ページ
- (14) 陸鏡若（りくきょうじやく）一八八五―一九一五 江蘇省武進（常州）の人。原名は輔、藝名の鏡若で知られる。十五歳で日本に留学したといひ、一九〇九年東京帝国大学文科哲学科に撰科生として入学。その間、春柳社に参加。一九一〇年帰国し、上海で文藝新劇場、新劇同志会、春柳劇場などを組織した。
- (15) 瀨戸宏『中国話劇成立史研究』四九ページ
- (16) 「回憶春柳」『歐陽予倩全集』第六卷、一五五ページ。初出は一九五八年刊『中国話劇運動五十年史料集』第一集。
- (17) 瀨戸宏『中国話劇成立史研究』六二―六三ページ。ただし根拠は示されてなく、筆者は捜すことができなかった。
- (18) 『北洋画報』第五八五期、一九三二年二月五日刊
- (19) 『北洋画報』第六二九期所載「悲鴻過津記」、一九三二年五月二十六日刊
- (20) 『北洋画報』第七六〇期、一九三二年四月二日刊
- (21) 註20に同じ。清末・民国期の書画の潤例（價格）については王中秀・茅子良・陳輝編著『近現代金石書画家潤例』（上海画報出版社、二〇〇四年七月刊）に詳しい。
- (22) 中華民国二十二年（一九三三）八月刊。中国の総合雑誌。上海・商務印書館から一九〇四年三月、月刊で創刊、一九二〇年一月から半月刊となり、一九四八年十二月、第四十四卷第十二号で廃刊。
- (23) 『申報』一九三九年六月三十日第二十二面、記事では他（彼）、黄先生などが混用されているが、訳出にあたって一人称に改めた。
- (24) 前引『美術新報』によると一九〇五年現在二十二歳で、生年は一八八四年。この記事からも生年は一八八四年となる。
- (25) 于非闇『中国画顔色の研究』（朝花美術出版社、一九五五年二月刊）によると、藤黄は海藤の樹皮に孔をうがち、流出する膠質の黄色い液を竹筒で受け、乾燥させると透明で中空になる。石青、石緑、銅緑と同じく有毒で、口に入れてはいけない。
- (26) 正式には協和医学院付属医院。北京、帥府園に現在もある。
- (27) 一九三七年七月七日、盧溝橋で勃発した日本軍と中国軍との衝突事件、日中戦争の発端となった。
- (28) 一九〇九年、柳棄疾（亞子）、高旭（天梅）、陳去病が設立した革命的文学団体。同年十一月蘇州で第一回合会を開催。上海の革命派新聞の編集者、南京の臨時政府要人に社友が多く、最盛時、社友は千余人に及んだが、一九一七年内紛がおこり、一九二三年停止。同年柳亞子は新南社を結成したが、一年あまりで停滯した。
- (29) 柳亞子（りゅうあし）一八八七―一九五八 清末民国の文学者、江蘇省呉県の人。名は棄疾。少年時代に梁啓超の影響をうけ、のち章炳麟、鄒容と交わって革命運動に参加、一九〇九年革命的文学団体南社を組織し、社長になった。民国以後、国民党革命委員会常務委員などを勤めた。鄭逸梅編著『南社叢談』（上海人民出版社、一九八一年刊）に柳亞子の七言絶句「救国画展会 健児塞北横戈日、画客江南吮墨時。一例衆芳零落尽、忍揮残泪為題詩。」が収められている。
- (30) 虞洽卿（ぐこうけい）一八六七―一九四五 浙江省鎮海県の人。外国銀行の買弁から汽船会社を起し、上海總商會会長、上海寧波紹興人同郷會會長などを勤めた。
- (31) 袁履登（えんりとう）一八七四―一九五四 浙江省寧波の人。上海聖約翰大学卒業。汽船会社総経理、銀行董事などを勤めた。
- (32) 郎静山（ろうせいざん）一八九二―一九九五 江蘇省淮陰に生れる。中国早期の写真家。十二歳から写真を学び十九歳で新聞界に入り、『申報』最初の写真記者となった。華社、上海攝影学会を創設。のち台湾に移り、中国攝影学会を創設した。台湾藝術学校校長、文化学院教授などを歴任。
- (33) 『申報』一九三九年七月一日第十二面「古画家黄二南画展」および同紙七月二日第十二面「書画消息・黄二南表演画」。なお、王震編著『二十世紀上海美術年表』（上海書画出版社、二〇〇五年一月刊）は同年六月一日、救済難民基金募集のため、上海で「黄二南画展」が開催されたこと伝えている。
- (34) 『新民報』（半月刊）第四卷第一期、一九四二年一月一日刊
- (35) 『自我演戯以来』は欧陽予倩の前半生の自伝で、一九二九年に執筆、その後、広東戲劇研究所の『戯劇』誌に連載発表したものを、解放後、単行書として出版するため、一九五八年夏、註を加えた。徐伯陽・金山合篇『徐悲鴻年譜』（台北、藝術家出版社、一九九一年六月刊）によると、徐悲鴻は一九三八年十一月中旬から香港に滞在し、翌一九三九年一月九日シンガポールに行き、その後インド、ミャンマー、マレーシアに旅行、再びシンガポールを経て一九四二年一月帰国した。「一九三八年秋」というのは、正しくは十一月中旬から暮れまでのことであろう。
- (36) 齊白石（さいはくせき）一八六三―一九五七 湖南省湘潭県の人。璜は二十七歳のときに改めた名。貧農の子に生れ、木工、指物師などを経て二十歳過ぎから画を学び、八大山人、呉昌碩風の水墨画を善くした。四十歳近くから賣画生活をおくり、新中国では貧農出身ということで多くの名誉を受けた。
- (37) 柯璜（かこう）一八七六（一説に七七）―一九六三 浙江省黄巖の人。一九〇六年の挙人、京師大学堂卒業、山西大学美術教員、山西博物館館長、北京故宮陳列所主任を歴任。解放後、中国美術家協会理事、重慶藝術专科学校校長を歴任。画にす

ぐれ、もつとも書を善くした。

- (38) 鶴田武良『申報』のこと(『中国近現代文化研究』第四号所載、同研究会二〇〇一年十二月刊)を参照されたい。

- (39) 錢選(せんせん) 二二三五頃—一三〇一後、宋末元初の在野の文人画家。字は舜举、浙江省呉興の人。人物・山水・花鳥を善くし、花鳥画では極度に写実性を追求した。『石渠寶笈初編』卷三十四—十三「元錢選画錦灰堆一卷、素牋本着色画、款識云、世間棄物、余所不棄、筆之于凶、……」。李葆恂(一八五九—一九一五)撰『無益有益齋論画詩』下卷「錢選・錦灰堆図、紙本横巻設色、以蟹匡・魚骨・蝦鬚・螺甲・荔枝・筍簍之属畫成、一族群蟻趨附蠕蠕如生、自題為錦灰堆、……」。この前に七言絶句「偶然弄筆戲拈來、白髮錢翁用意恢、楮葉棘猴同門巧、畫中新様錦灰堆」が付されていて、錢選の錦灰堆が後世の賞鑑家からも「新様」と見られていたことが窺われる。

- (40) 沈瑞清(しんずいせい) 道光・同治間(一八二一—一八七四)の人。清・張鳴珂撰『寒松閣談藝瑣録』卷三「沈祥叔、瑞清、一字味腴、秀水人、諸生、住開溪、兵燹後、移盛沢。善篆隸、工仕女及双鈎花卉」。

- (41) 陳沉龕(ちんげんがん) 一八九六—? 福州の人。上海に寄居して「錦灰堆」画で知られた。

- (42) 馬良(ばりょう) 一八四〇—一九三九 江蘇省丹陽の人。字は相伯。幼時に天主教会で教育を受け、神学博士学位を得た。清国の神戸領事を勤め、民国では代理北京大学校長、参政院参政などを歴任。

- (43) 一九三四年四月一日、北平・湖社画会発行。また王中秀・茅子良・陳輝編著『近现代金石書画家潤例』に収録。

- (44) 穆一龍(ぼくいちりゅう) 一九一五—? 上海の人。絵画にすぐれたが、図案、撮影を善くし、その図案文字は錢君甸と並び称された。また篆刻にも巧みであった。黑白攝影社社友。『中華民国三十六年中国美術年鑑』(上海市文化運動委員会、一九四八年刊)に詳しい経歴を掲載。

- (45) 『申報』一九四五年四月四日第一面。出品は鄭佐宸のほか朱孔陽(一八九二—一九八六)・書画、趙俊民(一九〇六—?)・花卉、錢化佛(一八八四—一九六四)・佛像、支慈庵(一九〇四—一九七四)・書画竹刻、宗履谷(活躍期一九二二—一九四七)・山水、謝之光(一九〇〇—一九七六)・仕女、李棲雲(一八九五—一九五六)・書画、熊松泉(一八八四—一九六二)・走獸。また『海上絵画全集』(上海書画出版社、二〇〇一年刊)第五卷、一〇七二ページ。

- (46) 于右任(うゆうじん) 一八七九—一九六四 中華民国の政治家。陝西省三原県の

人、震旦公学で馬良に学び、渡日して中国革命同盟会に参加、帰国して新聞を刊行して革命思想を鼓吹した。孫文の死後、国民党右派の指導者として政府要職を歴任し、台湾移転後は監察院長を勤めた。

- (47) はくこず。ふるい器物を題材とした絵画。

- (48) 『申報』一九三八年十月二十一日第十二面、同年十二月十二日第十一面、一九四〇年十月十二日第七面など。

- (49) 『申報』一九三六年五月十九日

- (50) 王震編著『二十世紀上海美術年表』四三〇ページ

- (51) 王震編著『二十世紀上海美術年表』四七〇ページ

- (52) 王震編著『二十世紀上海美術年表』四七五ページ

- (53) 林森(りんしん) 一八六二—一九四三 中国国民党の元老。福建省閩侯県の人。清末、米国で孫文の革命運動を援助し、辛亥革命直後に帰国して南京参議院議長に

就任。のち国民政府で重きをなし、政府主席となり、没するまでその職にあった。

- (54) 『申報』一九四一年六月二十一日第七面

- (55) 王中秀「歴史的失憶與失憶の歴史—潤例試解讀」(『近现代金石書画家潤例』所収) 九ページ

- (56) 鄭逸梅(ていいつばい) 一八九五—一九九二 上海の人、江蘇省立第二中学卒。同窓に歴史家の顧頡剛、画家の呉湖帆、文学家の葉聖陶などがある。中学時代から鄭逸梅のペンネームで文章を発表し、とくに人物の故事逸話、書画鑑賞に関する短文が好評を得た。著書に『南社叢談』(一九八一年)、『藝林散葉』(一九八二年)など數十冊がある。

- (57) 『清娛漫筆』所収、初版は一九六五年香港で出版。一九八四年七月上海書店から再刊、また『鄭逸梅選集』(黑龍江人民出版社、一九九一年五月刊)第二巻に収録。

- (58) 鄭達甫(ていたつぽ) 一八九一—一九六五 浙江省鎮海の人、別名孝綱。国画に長じ、鎮海普一学校教員を勤め、のち絵画を専業とした。一九五六年上海市文史館に入る(『上海市文史館館員名録』による)。

- (59) 本誌第三百五十一号所載、拙稿「研究資料 近百年中国絵画史研究 二・附一」に公刊。

訂正

三百八十七号所載「中国民国教育部第一次全国美術展覽会出品日本洋画について」に誤字があったので、次のように訂正します。

- 二〇ページ中段、右から一六行目 (誤) 植原久和代 (正) 埴原久和代